

## ① 永塚保夫氏（国後島元島民）



北方領土はどのような所かということ、私は終戦まで国後島に住んでいましたので、これからお話ししたいと思います。

北海道の東北の海上に連なっている、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の四島を北方領土と言います。

歯舞群島は小さい島がたくさんあり、一番近い島は根室半島の納沙布岬から 3.7 km 離れたところにあります。歯舞群島には水晶島（すいしょうとう）、勇留島（ゆりとう）、秋勇留島（あきゆりとう）、志発島（しぼつとう）、多楽島（たらくとう）などの島々があります。

色丹島は根室の東北にあり、書物によると、その昔、歯舞群島と色丹島は陸続きだったようです。色丹島は丘陵地で、ところどころに小さい沼や池がたくさんあり、とても美しい島です。

国後島は野付半島から 16 km 離れているところにあり、知床半島に挟まれているところにあります。国後島、択捉島は千島列島と連なっており、中央には千島火山帯があります。そのため切り立った崖の多い島で、国後島には爺爺岳（ちゃちゃだけ）、択捉島には散布山（ちりっぷやま）などの 1,000m 以上の高い山があります。

北方領土の全体の面積は、千葉県と同じくくらいの大きさになります。日本の離島で一番大きい島が択捉島です。2 番目に大きい島が国後島、次いで沖縄本島、佐渡島、奄美大島、淡路島となっています。

気候は寒いイメージがあると思いますが、それほど寒くはなく、平均気温は根室と同じくらいです。先日、北方領土に行ってきましたが、気候は根室より暖かかったです。冬は  $-5^{\circ}\text{C}$  くらいで、 $-10^{\circ}\text{C}$  を下回ることはあまりありません。雪は多く降ることはありませんが、3 月を過ぎると霧が発生し、天気が良くなることはあまりありません。年間通して風の強い日が多く、冬は吹雪の日が多いです。

第二次世界大戦終了時の 1945 年（昭和 20 年）の北方領土の人口ですが、歯舞群島は水晶島に 986 人、秋勇留島に 88 人など、全体で 5,281 人が住んでいました。色丹島には 1,038 人。国後島には 7,364 人。択捉島には 3,608 人が住んでいました。北方四島には 17,291 人の日本人が住んでいました。

私の住んでいた国後島の産業は、魚や昆布の海産物をはじめ、木材、鉱石など資源が豊かな島でした。資源の少ない日本にとっては、これらの開発は大変重要なものでした。

海産物の主な物は、サケ、マス、ニシン、サンマ、オヒョウ、カレイ、マグロなどが捕れていました。また、毛ガニ、タラバガニ、花咲ガニ、エビ、ホタテなども捕れて、当時これらは缶詰工場で加工し、国内外へ輸出されていました。

主な産業が漁業だったため、多くの人々は漁業関係の仕事に従事していました。

家庭用品や新聞、郵便物などは船で根室から運搬されていましたが、冬には吹雪や流氷などの影響により、数日遅れることもあり、不便を感じたこともありました。

島の道路は道幅がとても狭く、坂道も多かったことから、当時は荷物や物資を馬の背に乗せて、各集落に運んでいました。

島で一番困ったことは、病気やケガをしたときです。病院は各島に小さい診療所がありましたが、医者や設備が整っていません。急病人が出たときは、船で数日かけて根室や函館の病院に行くことがありました。

当時、島には娯楽は全くなかったのですが、島民が一番楽しみにしていたのは、小学校の運動会や学芸会です。地域の人々による演芸会などを楽しみにしており、みんな家族で参加していました。どこの地域でも会場は常に満員でした。



戦後の北方領土ですが、昭和 20 年 8 月 15 日に終戦を迎えましたが、ソ連軍は 8 月 18 日からシュムシュ島の北端に上陸し、シュムシュ島からウルップ島に南下し、択捉島にアメリカ兵が上陸していないこと確認した後、択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島に上陸を開始し、9月5日までに四島すべてを占領しました。

当時、私は国後島の瀬石（せせき）というところに住んでいました。

9月1日、午前 11 時ころに 10 隻くらいの小さな軍艦が上陸してきました。水陸両用船で海岸線の交通を遮断しました。当時、私は古釜布（ふるかまっぷ）というところの小学校へ通っていましたが、その遮断された海岸線が通学路だったので、馬のしっぽにつかまり、1.5 km くらい海岸線を馬に引きずられ、何とか集落に戻ってきました。その様子を集落の人たちに「兵隊が入ってきたが日本兵ではないようだ。」と話しましたが、集落の人たちは、みんな信じてくれません。

しかし、その話をしているとき、集落にソ連の兵隊が攻めてきました。

ソ連兵は、毎日必ず夜9時過ぎると、家に物色に来ました。当時、玄関につっかえ棒をしてソ連兵が入れないようにしていましたが、ソ連兵は玄関の戸を銃で叩き、穴などをあけたりしたので、渋々玄関を開けると、土足のまま家に入ってきて、戸棚や仏壇などを物色され、何もないと、そのまま帰っていきました。その時は家族みんなでストーブの周りで恐くて震えていました。そういうことが毎晩続き、つらい思いをしました。当時、ソ連軍は、万年筆や時計、手紙書く便箋を欲しがっていました。

9月1日のソ連軍上陸後、学校は閉鎖していたのですが、数日後、ソ連軍の指令により学校が再開しました。学校では強制的にロシア語を学ばされました。上陸したソ連兵は、住むところがなかったため、学校の体育館を取り上げ、兵隊の宿舎として使っていました。

当時、国後島には小学校が39校あり、私の通っていた小学校は本部だったので、39校すべての校旗を集め、学校の前に立てました。ソ連軍の兵隊の本部は、こういうもの立てるようでした。また、赤い旗をすべての家に立てさせました。後から分かったのですが、それはソ連の領土になった証のためであり、すべて家の軒先に立てさせたそうです。

ソ連軍侵略から3週間ほど経ったころ、家族会議を開いて、この島から逃げることにしました。

一週間くらいかけて家財道具を馬に積んで運び、親戚の漁船を借りて島を逃げました。島を逃げた日は、昭和20年9月27日です。その日は今でも忘れません。十五夜の晩で、月がとても綺麗でした。家財道具を船に積んで逃げたのですが、ソ連の監視船に捕まりました。その監視船は、日本の船を取り上げて使っているものでしたが、ソ連兵は乗っておらず、日本人が乗っていました。「どこに行くんだ」と聞かれ、「網を揚げに行くんだ」と嘘を言いましたが、その日本人は逃げるものだと思わずに薄々気づいていたと思います。どうにかこうにか、翌々日の朝の9時ごろに根室にたどり着きました。根室の岸壁に着いた時には、やっと日本に帰れたと思い、安心しました。

皆さんも機会があれば、一度納沙布岬に行って、直接、島を見てもらいたいと思います。間近に島があるのが分かります。我々元島民は、あと何年生きられるか分かりません。これからは、皆さんのような若い人に北方領土について関心を持ってもらい、皆さんの力で北方領土を返してもらいたいという気持ちで取り組んでもらいたいと思います。

<訪問校>

- 標茶町立虹別小学校（平成24年9月5日（水））



- 標茶町立中御卒別小学校（平成24年9月27日（木））

